

水、蛇、エーテル - 1900 年前後における「うつろい」への感性

上村博（京都造形芸術大学）

本報告はふたつの部分からなる。ひとつは、十九世紀末から二十世紀はじめにかけての流体や連続体への美学的な関心の高まりを、当時の物質観の変貌と関係づけて確認することであり、もうひとつは、その関心を今日の問題意識に照らして評価することである。

西洋の思想的伝統において、流動性への意識は、固体（そして粒子）の運動や衝突という力学的な世界観に押されがちであったものの、常に存在し続けた。プラトンの伝えるヘーラクレイトス、オウィディウスの変身譚、またプロティノスの哲学といった古代以来の伝統は連綿と続いている。そしてまた造形芸術の領域でも、たとえ個物の明瞭な輪郭線を描出することが重視されたことがあったにせよ、動くものへの関心は繰り返し現れる。しかし、19 世紀からは、流体への関心がなおのこと顕著な形で強まったように思われる。水に関係するオンディーヌ、オフィーリアなどの絵画的、音楽的テーマ。そして螺旋や蛇行線についての形而上学的かつ美学的な考察。さらに世紀末には時空を貫いて死者や生者を結ぶ精神の波動への文学的関心。芸術のさまざまな領域で頻出する水、流れ、波動への興味は、単にそれまでの伝統的なトポスが一举に復権してきたもののように見える。これは、歴史や時間の推移についての意識が広まった結果かもしれないし、そしてまた新たに発見された古代や東洋のさまざまな影響も十分あっただろう。

しかしそれに加えて、物理現象の捉え方や認識論モデルの変容も大きく関わっているのではない。「運動する物体」ではなく運動そのものを見る、あるいは時間を通じた動的変化を重視する態度の発生は、たとえばすでにヘーゲルにも認められる。しかし 19 世紀末の物質観、とりわけファラデーやマクスウェルの理論を受けた場の考え方や、現象を微細な物質の「化学」によって捉えようとする考え方は、その傾向をさらに一歩進めた。それは芸術的テーマとしての流体の復権に貢献しただけではない。また単に歴史のダイナミズムや運動の礼讃に終わるものでもない。むしろ微分的な時間において物質の組成を見つめる科学者の眼差しを提供した。逆説的に、瞬間の美学こそがうつろいの美学である。まさに蛇の髪の毛を持つメドゥーサがその瞳で人を石にしてしまうように、流れゆく時間にとらわれた瞬間、我々はそこに永遠が形をなすのに立ち会うのである。

現在の知覚自体の作用を凝視すること。これは近代美学の嫡子と言っても良いかもしれない。しかしこの貴重な嫡子はロマン主義以降、また 20 世紀以降もあまりにしばしばネグレクトされてきた。運動そのものではなく運動する主体や客体への関心は依然として強い。とりわけ記憶や場所という名の下にモニュメンタルな美学が席卷する今日、前世紀のはじめに鮮やかな形であらわれた「うつろい」への関心を振り返る意味も十分にあるのではないだろうか。